

小牛田町山前遺跡出土の塩釜式土器とラウンドスクレーパー

—北辺の古墳時代社会と続縄文文化—

青 山 博 樹

要旨 小文は、小牛田町に所在する山前遺跡出土土器の検討から、宮城県北部地域における古墳時代前期の様相についてまとめたものである。

山前遺跡はいわゆる豪族居館として知られる遺跡であり、その出土遺物は周辺の集落遺跡に比して外来的な要素をもつ土器が多いなどの特徴をもつ。その範囲は古墳時代社会の中にとどまらず、続縄文文化との交流を示す遺物をも含んでいる。とくに塩釜式期の住居跡にともなって出土した黒曜石製のラウンドスクレーパーは、両者の関係を考える際の有効な資料の一つになりうる。

宮城県北部地域には古墳時代の遺跡と重なりながら続縄文文化の遺物が多く分布しており、その南下は古墳時代前期にさかのぼるものである。

1. はじめに

遠田郡小牛田町に所在する山前遺跡は、1965・1974～75年の二次にわたって調査が行なわれた(小牛田町教育委員会1976)。出土した遺物は縄文時代から中世にわたり、丘陵の南斜面には長きわたる人の営みがあったことが明らかとなった。

この中でとくに注目されたのは、古墳時代前期の集落とこれを取り巻くように丘陵の裾をめぐる大規模な溝跡であった。その後、いわゆる豪族居館遺跡の増加によるあらたな知見から、当遺跡も再検討されるべき余地が生じているものと思われる。

筆者は、卒業レポートの題材として当遺跡の出土土器を整理する機会にめぐまれ、古墳時代前期の住居跡出土土器の整理を行なうことができた。この中には塩釜式の変遷を考える上で有効な情報を提供する床面一括資料や、塩釜式土器と続縄文文化の所産である黒曜石製のラウンドスクレーパーの共伴など、いくつかの問題を提起する資料が含まれていた。

小文はこれらの資料を紹介するとともに、その周辺の問題に若干の考察を加えるものである。

2. 山前遺跡の概要

山前遺跡は、宮城県北部に位置する大崎平野の東部、遠田郡小牛田町の独立丘陵上に所在する。付近には京銭塚古墳(前方後方墳・66m)、保土塚古墳(円墳・50m)、蜂谷森古

墳（円墳・20m）などの前期古墳が知られており、大崎平野では中央部の古川市周辺、西部の宮崎町周辺とならんで古墳時代前期の大型古墳の集中する地域である。

これまでの調査で明らかになっていることは、丘陵の南斜面に52軒の住居跡が検出され、このうちの25軒が古墳時代前期のものであること、また丘陵の裾をめぐるように幅3～6m、深さ1～4mの溝が掘られていることである。この大溝には方形の張り出しが付き、調査区内の総延長だけで約250mの長さをはかる大規模なものである（小牛田町教育委員会1976）。

3. 山前遺跡出土遺物の概要

整理の対象としたのは、古墳時代前期の遺構のうち遺物の出土量が多かった住居跡9軒と土坑1基の土器である。これに加え、大溝・遺跡外出土土器の中から山前遺跡の性格を理解する上で重要と思われるものを取りあげて図化した。以下、その概要を述べる。

3号住居跡は13点を図示した（図1-1～13）。このうち床面出土は6点である。2の高杯は杯部底面に半球状の突出があり、中実棒状の脚部がつくものと思われる。

8号住居跡は16点を図示し（図1-14～29）、このうち床面出土が4点ある。東西南部では例の少ない結合器台が出土している。

20号住居跡は5点を図示した（図2-1～5）。いずれもピットからの出土である。当住居跡出土土器は最終的な調整をケズリによって行っているものが多い。

21号住居跡は15点図示したものうち（図2-6～20）、床面出土が2点ある。堆積土からではあるが、結合器台を出土している。

30号住居跡は、34点を図示した（図3・4）。山前遺跡で最も良好な床面一括資料を有する。これらは小型丸底鉢、「八」字にひらく脚部を持つ高杯、中空棒状（註1）の脚部を持つ高杯が共伴するなど編年上の問題を多くかかえる資料である。これに加えて、続縄文文化の所産である黒曜石製のラウンドスクレーパーが床面から出土している。

31号住居跡（図5）では、16点の床面出土資料を有する。脚頂部が閉じた（註2）中空棒状脚の高杯が出土している。

48号住居跡の6点（図6-1～6）は、いずれもピットからの出土である。脚頂部が開いた中空棒状脚の高杯が出土している。

49号住居跡は4点を図示した（図6-7～10）。いずれも床面からの出土である。結合器台が出土している。

53号住居跡（図6-11～21）からは中空棒状脚の高杯が2点出土しており、いずれも脚頂部が開くものである。

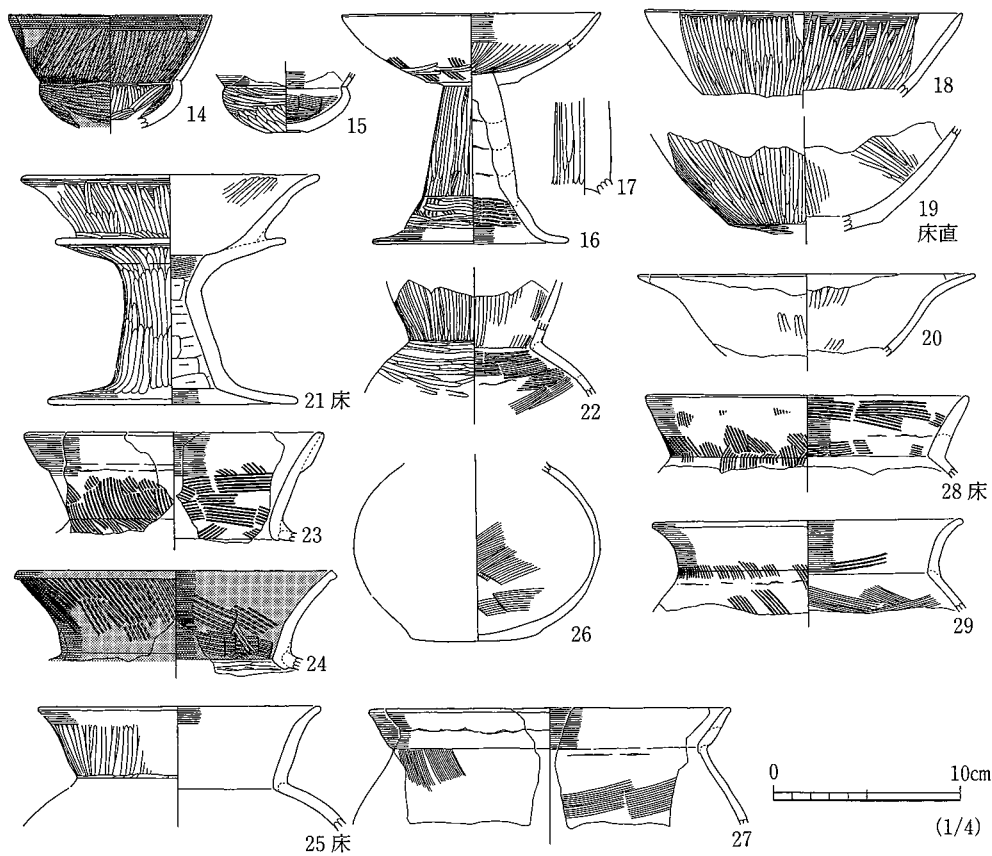
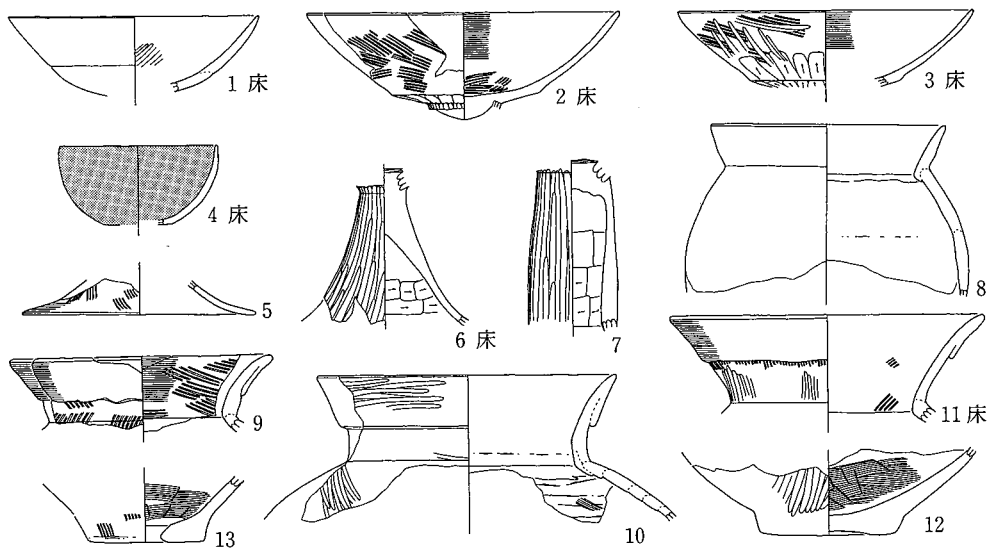


图1 3·8号住居迹出土土器

10号土坑（図6—22・23）からは、中空棒状脚の高杯と壺が出土している。

このほかに11点の土器を図示した（図7）。1は二重口縁鉢、2～5はS字甕、6はヒサゴ壺の系譜を引くものであろう。7は柳ヶ坪型壺の系譜を引くもの、9は大廓式系の壺、10は支脚形土器品である。これらはいずれも溝跡、および表土中からの出土である。

4. 出土土器の編年的位置

以上に述べてきた山前遺跡出土土器の編年的位置については、各住居跡出土土器に共通して小型丸底鉢や中空棒状脚をもつ高杯が多く含まれることから、塩釜式でも古い部分を除いた段階にその中心があると考えられる。

この中のもっとも良好な床面の一括資料であり、黒曜石製のラウンドスクレーパーを相伴している30号住居跡出土土器の編年的位置について検討してみよう。この資料は小形丸底鉢、脚部が「八」字に開く高杯、中空張和脚の高杯が相伴しているという点で、これまでに知られていない様相をもつ。

図3～2の小型丸底鉢は、口縁部高が体部高を凌駕するなど口縁部が発達し、磨滅が激しいものの体部にヘラケズリの痕跡はみられないことなどの特徴から、そのもっとも古相の精製段階に位置づけられる（青山1997）。

ここで注意されるのは、二種類の器型の高杯がこれに相伴していることである。同7の高杯はこれまで小形丸底鉢との相伴例がなく、その出現以前に位置づけられてきたものである（次山1992、辻1993・1995）。類例を、仙台市伊古田遺跡S I 14（渡部ほか1995）、同戸ノ内遺跡4号住居跡（渡部・主浜1984）、名取市十三塚遺跡78C尾根2号住居跡（恵美1978）などに求めることができる。当住居跡の資料は、「八」字に開く脚部をもつ高杯が小形丸底鉢の出現後にも存続することを示している。山前遺跡出土例と同じ段階に位置づけられる資料に、大和町下草古城跡第2集中地点（天野ほか1994）出土の高杯をあげることができ、これらは器高に対する脚部の高さの割合がやや大きいという特徴を有している。この点を、この高杯における新しい様相とすることができる。

また同10の中空棒状の脚部をもつ高杯についてもこれまで良好な資料がなく、およそ小形丸底鉢の粗製段階にいたって出現するものと考えられていたものである。当住居跡で精製段階の小形丸底鉢や「八」字に開く脚部をもつ高杯に相伴したことにより、さらに古い段階に出現していることは明らかである。その特徴についても、脚上部にいたって器壁が厚みを増すことから、31号住居跡出土の高杯（図5—3）と同様、脚頂部は閉じるものと思われ、その淵源である畿内での特徴（次山1993）により近い形態をもつ。すなわちこれをもってより古相とすることができ、また開いた脚頂部をもつ高杯を出土している48・53

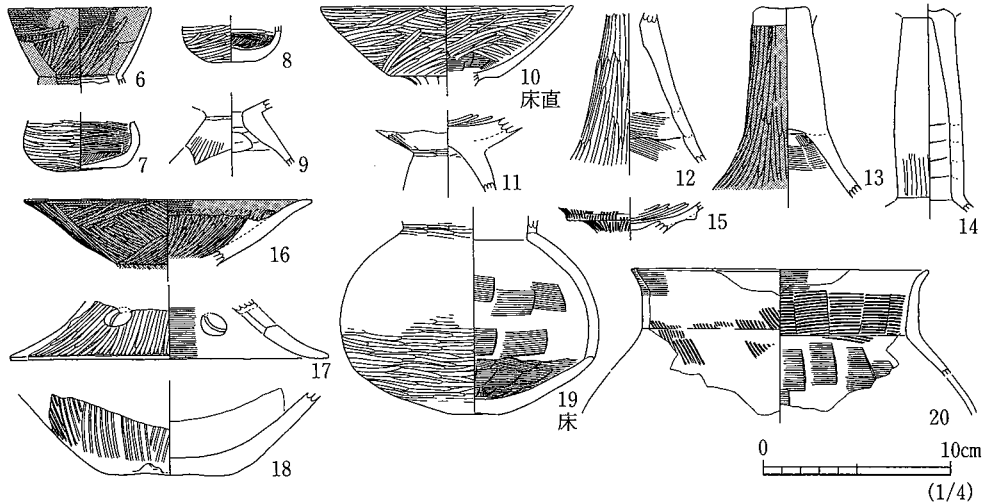
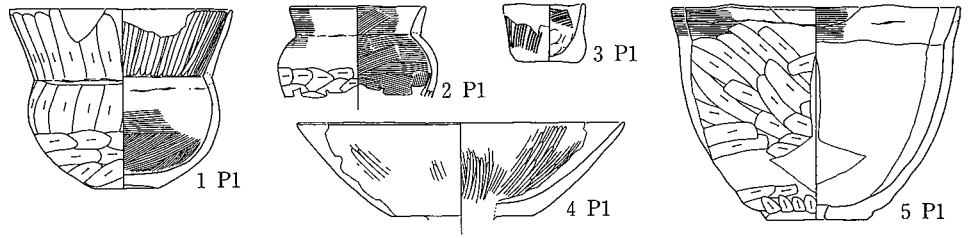


図2 20・21号住居跡出土土器

号住居跡をこれに後続するものとする事ができる。

この山前遺跡30号住居跡出土資料は、塩釜式の変遷の中における小形丸底鉢の精製段階に位置づけられ、この段階における「八」字に開く脚部と中空棒状脚の高杯の存在を明らかにするものである。

山前遺跡は中では30・31号住居跡出土土器より古い様相をもつ資料はない。このことから、当遺跡な古墳時代前期の集落が形成された時期をこの段階とすることができる。さらに山前遺跡におけるこの段階の資料は、現状では宮城県北部地域においてもっとも古い様相をもった土器群の一つであるといえる。

5. 30号住居跡出土の黒曜石製ラウンドスクレーパー

30号住居跡の底面からは黒曜石製のラウンドスクレーパーが出土している。このラウンドスクレーパーは、両極打法により剥片を得たのち背面に二次加工を加えたものである。背面には一部自然面を残している。石質は不純物を含み白色の縞模様を有するものである。

このような特徴を持つ石器は、佐藤信行氏（佐藤1975）が指摘している北海道系の土器にとまなうことの多い黒曜石製のラウンドスクレーパーにその特徴が一致する。

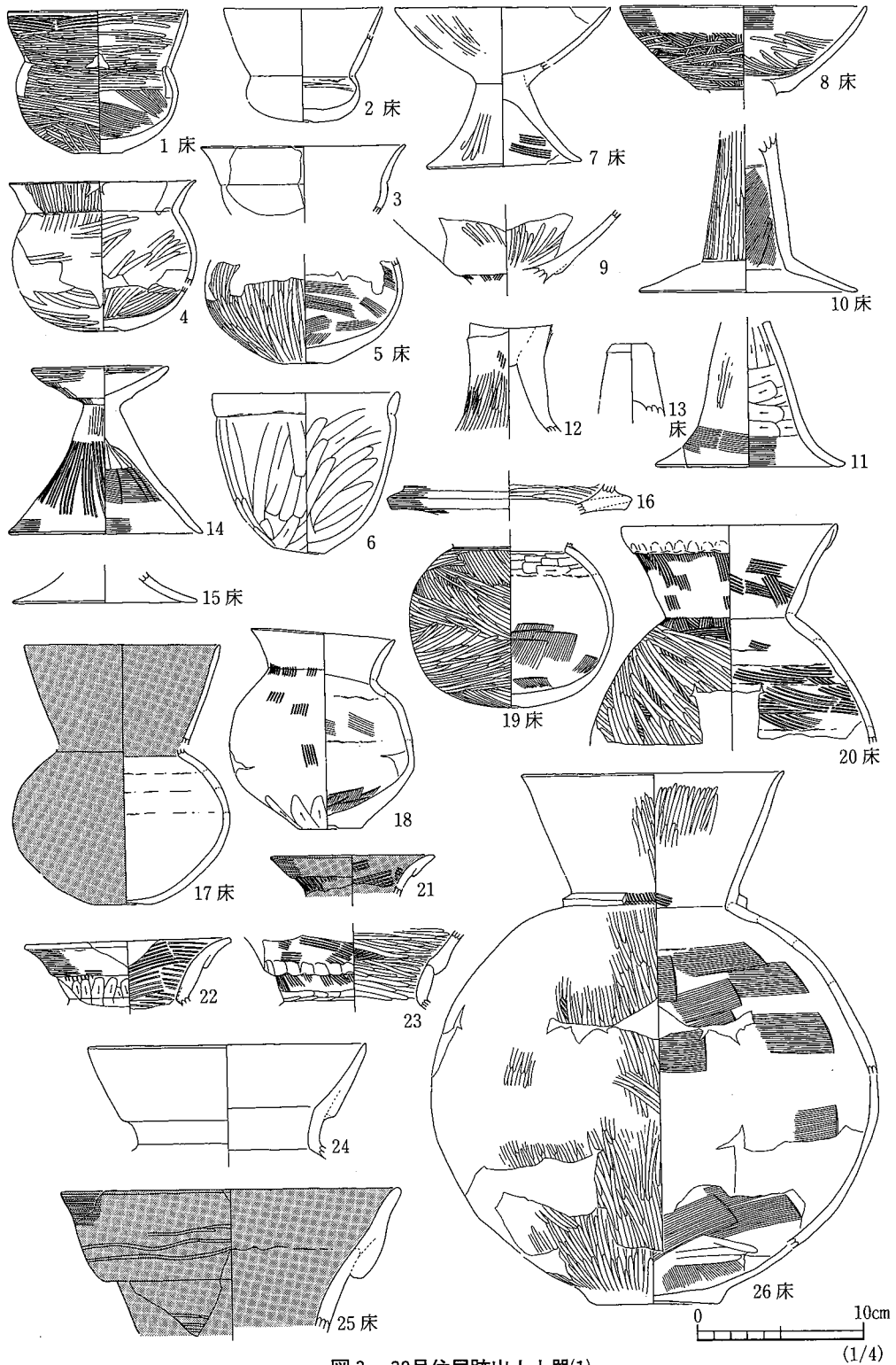


图3 30号住居跡出土土器(1)

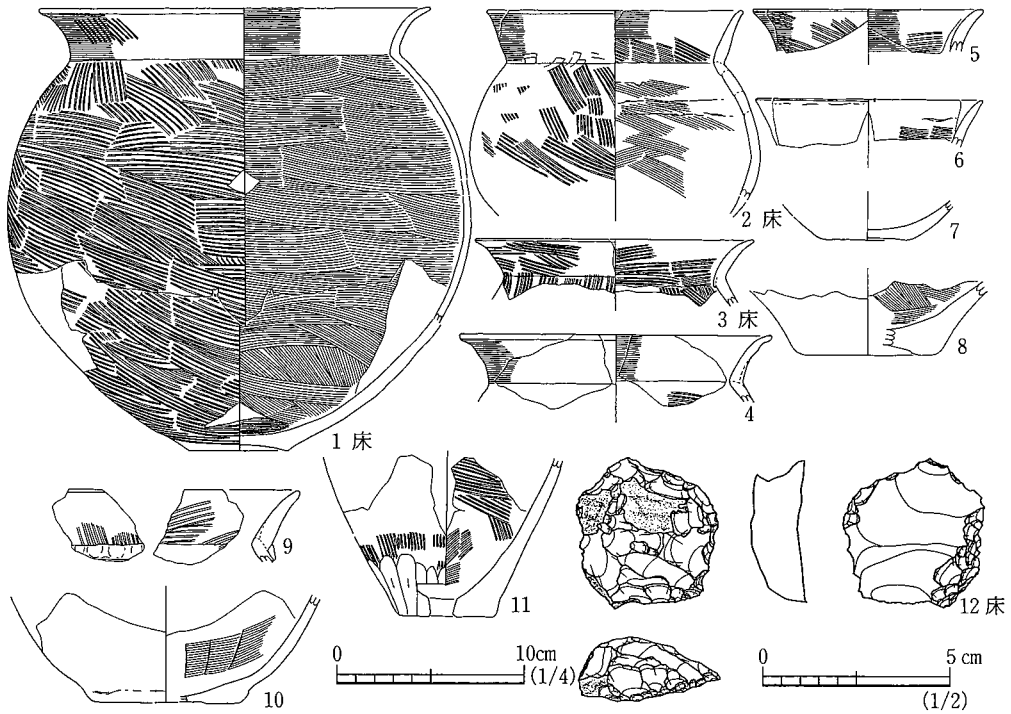


図4 30号住居跡出土土器(2)

古墳時代前期では、ほかに瀬峰町大境山遺跡9号住居跡で堆積土からではあるが黒曜石製のラウンドスクレーパーが出土した例がある(阿部1983)。また色麻町色麻古墳群の11号住居跡では、黒曜石の剥片が床面から出土している(古川1983)。ただし両者が床面で共伴する資料は、本住居跡の資料が唯一のものである。

山前遺跡30号住居跡の一括資料は、古墳時代社会と続縄文社会の関係を考える上で有効な資料であると思われる。

6. 山前遺跡の性格

図7などに示したように、山前遺跡からは東西南部にその類例をみることの少ない、外的要素の強い土器が少なからず出土していることが注目される。

それぞれの土器の出自は東海・駿河・山陰・畿内などに求めることができるが、それぞれの形は原形を逸したものである。これらのことは山前遺跡がそれぞれの地域と直接的な交流を行っていたのではなく、ことなる地域を中継した二次的な波及の結果であると考えられる。また山前遺跡は宮城県内で結合器台を出土する数少ない遺跡の一つであり、その数量も単発的なものではなく、一定の量を保有しているものと思われる。結合器台の出土は東西南部全体を見渡しても多くはなく、その分布の中心は関東地方に求めることができ

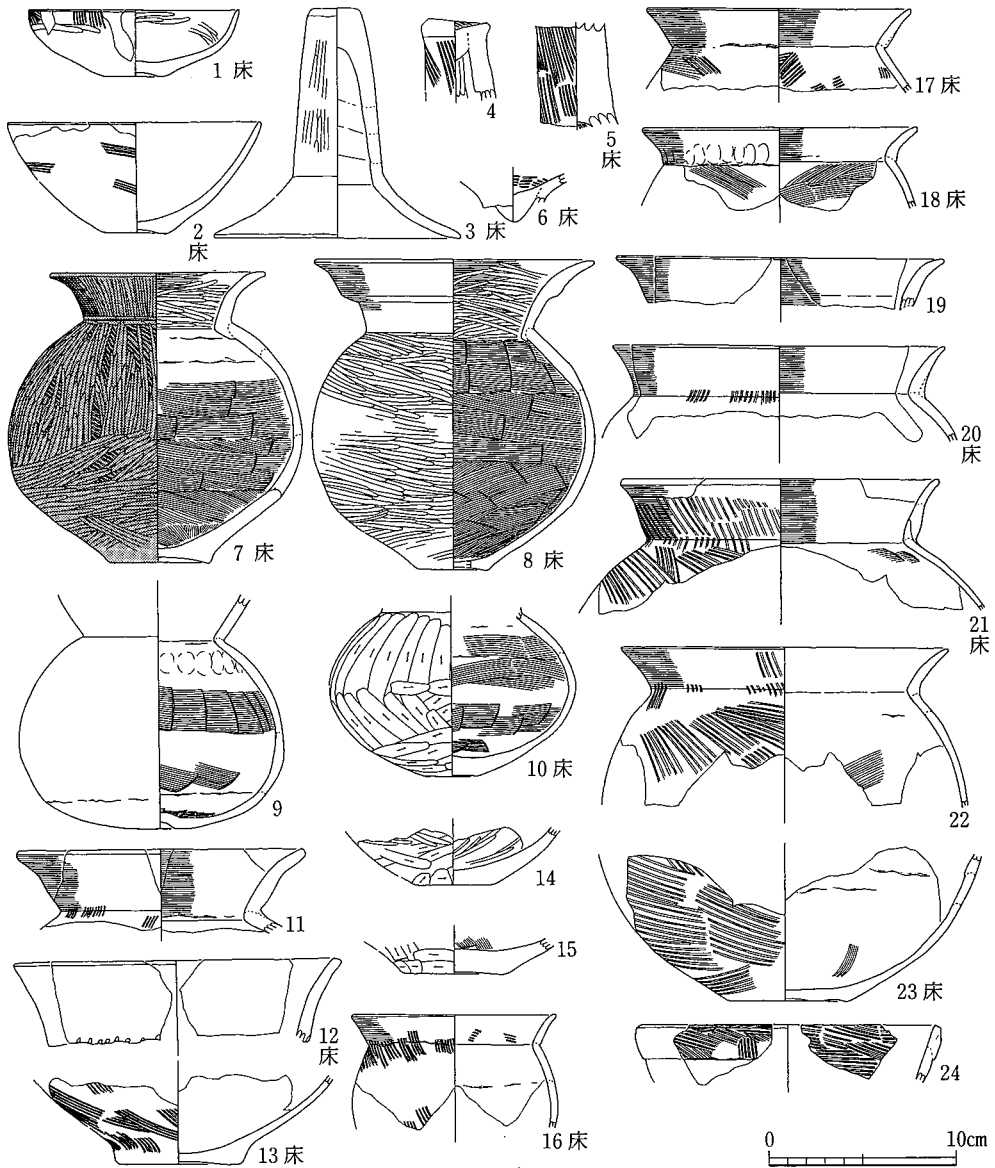


図5 31号住居跡出土土器

(1/4)

る。山前遺跡でのこのような土器のあり方は周辺の遺跡との様相の違いを見いだすことができる。

また、高杯については中卒棒状の脚部をもつものが卓越している点に注意される。東北南部ではむしろ柱実棒状脚の高杯が多くみられ、中空棒状脚をもつ高杯の出土は多くはない。山前遺跡の高杯にみられる中空棒状脚の卓越は、東北南部においてはやや特異な様相といえる。この点についても、周辺の集落と山前遺跡の様相をへだてるの要素の一部と考えられる。

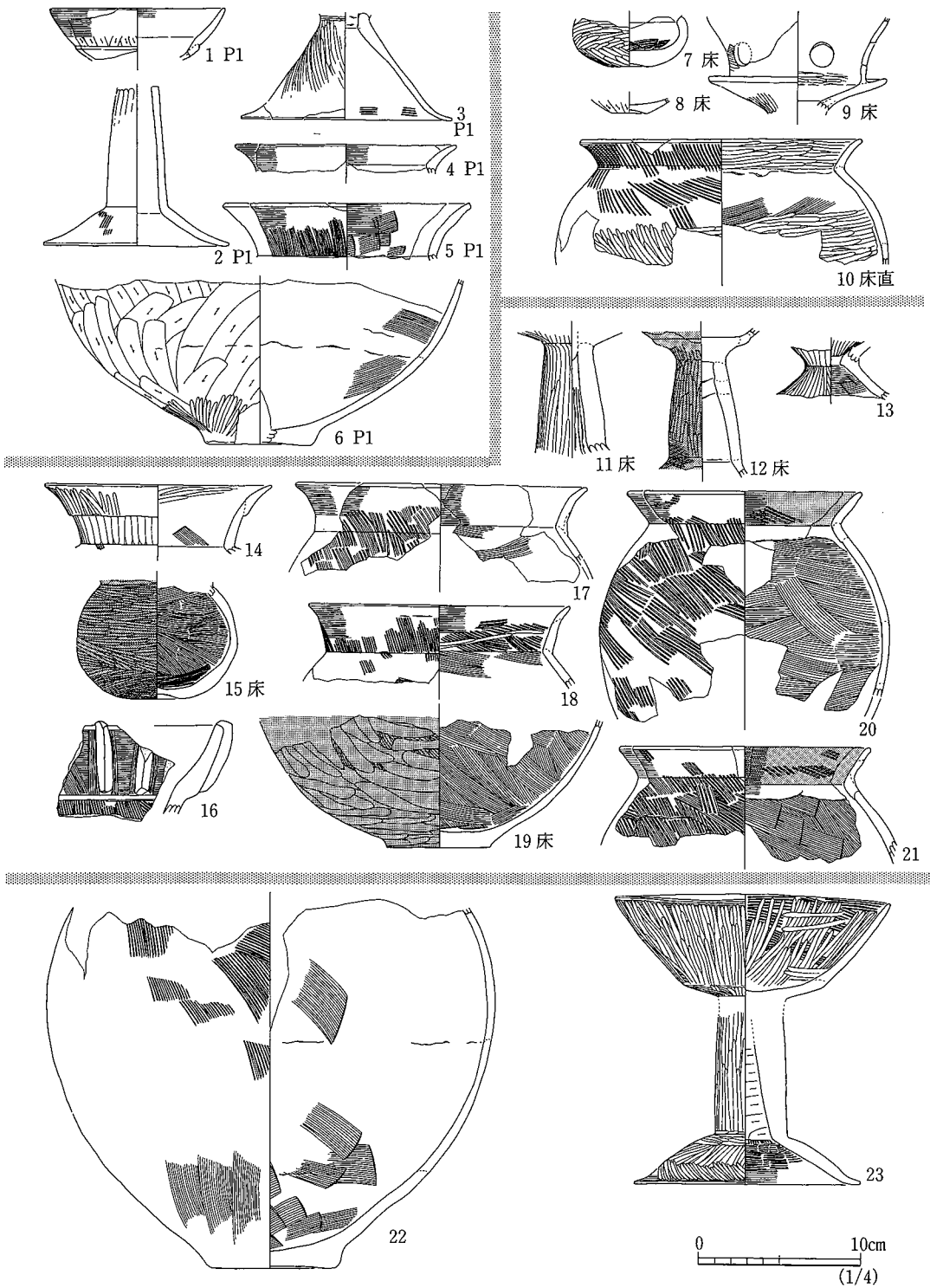


图6 48·49·53号住居跡、10号土坑出土土器

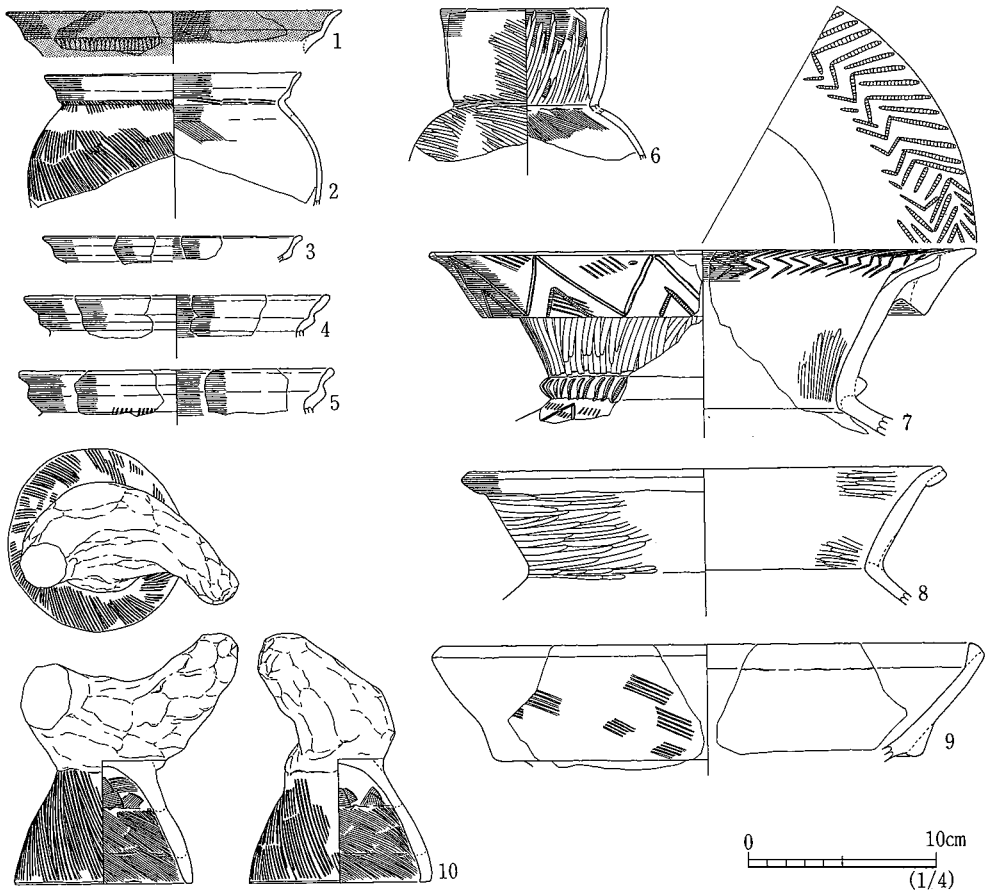


図7 その他の出土土器

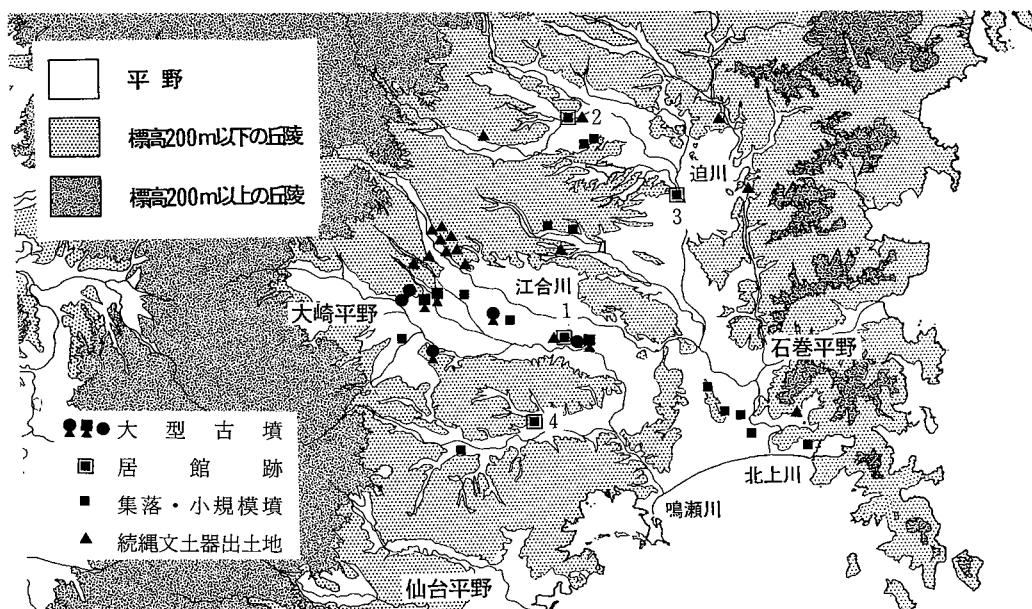
また、その集葉の規模や大規模な土木工事を必要とする大溝の存在は、周辺に同時期の
大規模な集落が確認されていないこととあわせて、周辺の前期古墳の被葬者との関連を想
定させる。

以上に述べてきたように、土器にみる山前遺跡の周辺の集落との様相の違い、続縄文文
化の遺物の出土、大溝の存在は、古墳時代社会の北辺に位置する環境ともあわせて、当遺
跡の政治的・経済的な役割を予想させる。

7. 宮城県北部地域の様相

これまで山前遺跡を中心にその様相を述べてきたが、さらにこの遺跡が位置する宮城県
北部地域の様相について若干ふれよう。

宮城県域北部において北海道系遺物が多く出土することを認識し、その年代を考える際
に宮城県での研究が重要な位置を占めることが、佐藤信行氏の一連の研究により指摘され
てきた(佐藤1968・1975・1976・1984・1994など)。現在もこの問題をとりまく状況は氏の



1. 山前遺跡 2. 伊治城跡 3. 佐沼城跡 4. 鶴館遺跡
 続縄文土器出土地については、佐藤（1984）をもとに作成

図8 古墳時代前期における宮城県北部地域の様相

成果によることが大きい。さらに宮城県北部以外においても青森県天間林村森ケ沢遺跡(阿部1994)や山形県鶴岡市山田遺跡(真壁・松田1998)(註3)など、北海道系の遺物を出土する遺跡が増えている。

宮城県域における主な共伴例を概観すると、居館跡と考えられる築館町伊治城跡では、塩釜式とともに北大式の古い段階に位置づけられる土器(註4)が方形区画溝の中から出土し(佐藤1992)、両者が共伴する蓋然性の高い資料としてその定点が一つとなる可能性を示している。さらに石巻市新金沼遺跡で、塩釜式と後北C2-D式が共伴する資料が知られている(註5)。これらの共伴関係は、後北C2-D式から北大式への移行期がほぼ塩釜式の中に対応することを示している。山前遺跡での塩釜式土器とラウンドスクレーパーの共伴は、北大式の古い段階が古墳時代前期に遡ることを示す資料の一つといえる。

図8は、上述のような併行関係の理解をうけて、古墳時代前期の遺跡と後北C2-D式および北大式土器を出土した遺跡の分布を地図上に示したものである。この図からは、あらためて古墳時代社会と続縄文文化の出土遺跡の分布域の重複が認識できるであろう。

さらに詳細にみるなら、古墳文化の所産による遺跡は集落・墓域・生産域のいずれをもみることができるのに対し、続縄文文化の遺跡は遺物のみを出土するものであり、遺構を検出した遺跡はない。このことは従来指摘されているように、古墳時代社会への続縄文文化を担った人々の来訪であることに他ならないことをあらためて認めるものである。

また宮城県北部地域において首長墓クラスの大型古墳の築造が認められるのは大崎平野までであるが、集落跡や卓越した規模の古墳を含まない小規模古墳群の築造はさらに石巻平野北部の迫川流域にまでみることができる。この地域は、前期の遺跡の分布が4か所と、現時点では以南の地域に比してやや稀薄な地域であるといえるが、この半数にあたる築館町伊治城跡下層（佐藤1992）および迫町佐沼城跡下層（佐久間・小村田1995）で、方形区画溝、柵列、棟持柱をもつ掘立柱建物など、有力層の居館的な施設を有する遺跡の存在が明らかになっている。前述のように、このうち伊治城跡では方形区画溝の中から塩釜式土器と北大式土器が出土しており、山前遺跡と類以する様相を認めることができる。

このように宮城県北部地域は、居館的な施設を伴った集落遺跡が大郷町鶴館遺跡（三好・窪田1994）を含めて他地域に比して多く検出されていること、続縄文文化の遺物の分布が集中していること、また両者に関連が認められることなど、古墳時代社会の北辺にあってのやや特異な様相が指摘できるであろう。

このような様相の解釈については、東北北部・北海道で出土する古墳文化の所産である文物の存在（大場1977、畠山1966など）から、宮城県北部地域を介した交易（辻1996）を想定する意見がある。

8. ま と め

山前遺跡出土遺物の整理でえられた資料をもとに、その編年的位置と山前遺跡の性格、宮城県北部地域の様相について述べてきた。とくに宮城県北部地域における特異な様相をもつ遺跡と、当地域におけるこれらと続縄文文化の関係について概観した。

弥生時代後期終末から古墳時代前期にかけては、土器の移動という現象が列島的な規模で行われた。当地域における北方との交流もこの時期を端緒としており、ここでふれた資料は以後も断続的に続いた両者の関係の初期の姿を示す遺物と思われる。その背景をこれらの考古資料から明らかにすることが課題であろう。

小文は平成7年度に東北学院大学文学部史学科に提出した卒業レポートをもとにして、あらためて稿をおこしたものである。終始懇切な御指導をいただいた辻秀人先生に深く感謝申し上げます。また資料をお貸しいただいた小牛田町教育委員会と東北歴史資料館、遺構実測図閲覧の際にお世話いただきました東北歴史資料館の阿部博志氏、須田良平氏（当時）、石器の観察に際し御指導をいただきました柳田俊雄先生に感謝申し上げます。そのほか多くの方々に多大なりお世話をいただきました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

〔付記〕 土器の図化にあたって、すでに実測図が公表されているものについても今回あらためて実測し掲載させていただきました（図1—21、図5—7・8、図6—22・23）。またその際これまで一括資料として公表された土器が別々の遺構から出土したものであることを、土器に付された註記により確認した。また遺構の実測図を実見した際に、報告書に記載されている遺構名と一部ことなるものがあることを付言する。

註

- 註1 この高杯の脚部形態は「屈折脚」という用語が一般的であるが、東北南部では棒状の脚部をもつものに、中空・中実の両者が存在し、これら二者を対比する意味から「中空棒状脚」という呼称を用いることとする。
- 註2 「閉じた脚頂部」とは、中空棒状脚をもつ高杯の成形時において、脚部の完成した時点において頂部がふさがれているものをさす。これに対し、脚部が完成した時点でその頂部がふさがれていないものを、「開いた脚頂部」と表現する。
- 註3 土器の実見に際し、鶴岡市教育委員会の真壁建氏・松田亜紀子氏のお世話になりました。記して感謝申し上げます。
- 註4 この土器については北大Ⅰ式よりも古い要素をもつ「モヨログループ」に位置づけられるとする意見がある。筆者も北大式の中でもっとも古い特徴を備えたものであるという点でこの意見と一致する。
- 註5 石巻市教育委員会の芳賀英実氏・小暮 亮氏・阿部 篤氏のご教示をえました。記して感謝申し上げます。

【引用・参考文献】

- 青山博樹 1997 『東北南部における古墳編年と土器編年の対応についての予察』『福島考古』第38号 福島県考古学会
- 阿部義平 1994 『蝦夷の墓—森ヶ沢遺跡調査概報—』国立歴史民俗博物館
- 阿部正光 1983 『大境山遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第4集 瀬峰町教育委員会
- 甘粕 健・春日真実編 1994 『東日本の古墳の出現』 日本考古学協会
- 天野順陽ほか 1994 『下草古城跡ほか』宮城県文化財調査報告書第160集 宮城県教育委員会
- 恵美昌之 1978 『十三塚遺跡発掘調査報告書』名取市文化財調査報告書第6集 名取市教育委員会
- 大場利夫 1977 「礼文島出土の鹿角製刀装具」『考古学ジャーナル』No.133 ニューサイエンス社
- 小野裕子 1998 「北海道における続縄文文化から擦文文化へ」『考古学ジャーナル』No.436 ニューサイエンス社
- 日下和寿 1997 『九戸郡山形村丹内Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県立博物館調査研究報告書第13冊 岩手県立博物館
- 小牛田町教育委員会 1976 『山前遺跡』
- 佐久間光平・小村田達也 1995 『佐沼城跡』迫町文化財調査報告書第2集 迫町教育委員会
- 佐藤信行 1968 「宮城県岩出山町木戸脇裏遺跡—所謂北大式の南漸資料—」『考古学雑誌』53—4 日本考古学会
- 佐藤信行 1975 「本州における北大式遺跡の分布とその意義」『北海道考古学』第11輯 北海道考古学会
- 佐藤信行 1976 「東北地方の後北式文化」『東北考古学の諸問題』寧楽社

- 佐藤信行 1984 「宮城県内の北海道系遺跡」『宮城の研究』I 考古学篇 清文堂
- 佐藤信行 1994 「東北地方南部の縄文文化と研究史」『北日本縄文文化の実像』第5回縄文文化検討会シスポジウム 縄文文化検討会
- 佐藤則之 1992 「VI.第18次調査」『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第5集 築館町教育委員会
- 高橋誠明 1998 「角塚古墳前夜の大崎平野」『角塚古墳シンポジウム 最北の前方後円墳』胆沢町教育委員会
- 次山 淳 1992 「塩釜式土器の変遷とその位置づけ」『究班』埋蔵文化財研究会15周年記念論文集
- 次山 淳 1993 「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』40-2 考古学研究会
- 辻 秀人 1993 「東北部の古墳出現期の様相」『シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 辻 秀人 1995 「東北部における古墳出現期の土器編年—その2—」『東北学院大学論集—歴史学・地理学—第27号 東北学院大学学術研究会
- 辻 秀人 1996 「蝦夷とよばれた社会」『古代蝦夷の社会と交流』古代王権と交流1 名著出版
- 津島知弘ほか 1997 『永福寺山遺跡』—昭和40・41年発掘調査報告書— 盛岡市教育委員会
- 中村五郎 1982 「縄文土器編年をめぐる諸問題」『北奥古代文化』第13号 北奥古代文化研究会
- 中村五郎 1992 「古式土師器・縄文土器編年をめぐる」『北海道考古学』第28輯 北海道考古学会
- 丹羽 茂 1985 『今熊野遺跡・一本杉遺跡・馬越石塚』宮城県文化財調査報告書第104集 宮城県教育委員会
- 畠山三太郎 1966 「北海道の馬蹄状堅櫛について」『北海道考古学』第2輯 北海道考古学会
- 藤沢 敦・大谷 基 1998 「宮城県地域における豪族居館について」『古墳時代の豪族居館をめぐる諸問題』第8回東日本埋蔵文化財研究会 東日本埋蔵文化財研究会群馬県実行委員会 群馬県考古学研究所
- 古川一明 1983 「色麻古墳群」『宮城県営園場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書』宮城県文化財調査報告書第95集 宮城県教育委員会
- 眞壁 建・松田亜紀子 1998 『市内遺跡分布調査報告書』山田遺跡 平成8・9年度発掘調査概報 鶴岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第8集 鶴岡市教育委員会
- 三好秀樹・窪田 忍 1994 『大郷町鶴館遺跡』大郷町文化財調査報告書 大郷町教育委員会
- 村田晃一 1997 「陸奥中部にみる北との交流」『蝦夷・律令国家・日本海』日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会
- 渡部 紀ほか 1995 『伊古田遺跡』—仙台市高速鉄道関係遺跡発掘調査報告書III— 仙台市文化財調査報告書第193集 仙台市教育委員会
- 渡部弘美・主浜光朗 1984 『戸ノ内遺跡』仙台市文化財調査報告書第70集 仙台市教育委員会